紹介

児玉善仁著『イタリアの中世大学――その成立と変容――』

大学の「改革」は今日、全世界的に課題とされている。主要先進国の大学が大衆化の時代を迎えて久しく、日本では全入時代と言われる現象も生じている。とはいえ、その誕生以来、大学とは絶えず変化し続ける組織でもあった。中世のヨーロッパに初めて「大学」という組織が誕生した当時、そこで学んでいた人々は、現代におけるよりもいっそうの多様性を帯びた集団だったといえる。貴族出身の遊蕩学生がいれば、その使い走りをして生活費を稼ぐ苦学生もいる。いまだラテン語のおぼつかぬ青年から、既に一定の地位を得ている壮年の留学者まで、年齢層も様々である。またその出身地は、キリスト教界全域に及んでいたほか、彼らはしばしば大学から大学へと遍歴し、方々で乱痴気騒ぎを繰り広げる一方、活発な知的交流を行なってもいたのだった。

こうした中世大学の様子について、児玉善仁氏は既に訳書『中世イタリアの大学生活』（グイド・ザッカニーニ著、平凡社、一九九〇年）にて、教師や学生たちの活き活きとした姿を紹介している。その舞台となった「世界最古の大学」ボローニャ法科大学をはじめ、本書においては、大学組織そのものの成立過程と、その機能の変遷が論じられる。以下に、本書の内容を紹介したい。

序章と終章のほか一四章からなる本書は、全五部に分けられている。

第Ⅰ部　ボローニャ法科大学の成立と組織構造
第Ⅱ部　法学学位の普遍性
第Ⅲ部　「医学部」の成立と組織の変容
第Ⅳ部　医学の教育制度化と学位の意義
第Ⅴ部　パドヴァ大学の地方性と普遍性

この構成からも分かるとおり、第Ⅰ部から第Ⅳ部までの著者の問題関心は大きく二点に集約される。すなわち、大学という教育機関を形成するに至った複数の人的組織の成り立ちと、そこで授与される学位が意味するものである。前者については法制的観点を取り入れつつ、なぜボローニャの法科大学団は、パリなどとは異なり、もっぱら学生のみによって構成され、教師を排除した団体であったのか、といった根源的な問題に解が与えられていく。後者については学位の実効性の根拠が何によってもたらされ、その内実がどのように変化していったか、という問題が、法学と医学の学位を対象としてそれぞれ考察されている。いずれも一組織の制度的変遷を個別に追うだけではなく、他都市の大学団や職業組合との関係までも視野に入れ、それらが相互に影響しつつ変容する過程が明らかにされる。

中世大学の制度化とは、もともと固有の校舎さえ持たなかった大学団が、普遍権力や各コムーネの後援のもと、それらの教育政策や行政制度に取り込まれてゆく過程であるといえる。しかし、そうした関係が必ずしも大学の国際性の喪失に至らなかった例として、第Ⅴ部において焦点をあてられるのが、一五世紀初頭以来ヴェネツィア共和国の支配下に入ったパドヴァ大学である。富裕層は法学、貧困層は神学といったように、同大学は社会階層に応じて必要と考えられた学問を提供し、かつ経済的利益を生

み出す場として位置づけられ、共和国による積極的な介入を受けることになった。ところが同時に、パドヴァ大学はヴェネツィアによる振興政策を背景に各地から学生を集め続け、「地方性と普遍性」を両立させることで、それまで以上の発展を遂げたのである。

さて欧米における大学史研究は一九世紀にさかのぼる伝統を有しているが、近年はジャック・ヴェルジェ『ヨーロッパ中世末期の学識者』（野口洋二訳、創文社、二〇〇五年）のように、教育史・学校史の枠にとどまらず、文化や社会、政治といった広い文脈との関わりの中で教育や知識人の展開を明らかにする研究が増加してきたように思われる。わが国における中世大学史研究もまた大きな発展の兆しを示している。単著として読めるものには、フランス・パリ大学の諸相を扱った田中峰雄『知の運動』（ミネルヴァ書房、一九九五年）、広くドイツ全体を対象とする平野一郎『中世末期ドイツ大学成立史研究』（名古屋外国語大学、二〇〇一年）等がある。本書は地域としては初めてイタリアを専門的に取り扱った研究書であり、時代としては大学草創期から中世末期までを中心に、大学の起源や機能という根本的な問題を論じ、さらには近世以降の展望に関しても極めて示唆に富む内容となっている。地域と時代を超えて伝播し、絶えず変化を経験しつつ今日なお存続する大学という組織、また教育史のみにとどまらない「知の歴史」に興味を持たれている方にも是非一読をお勧めしたい。

（A5判　三八五＋七〇頁　二〇〇七年一二月　名古屋大学出版会　税別七六〇〇円）

（中田恵理子　京都大学大学院文学研究科修士課程）

水内俊雄・加藤政洋・大城直樹著『モダン都市の系譜――地図から読み解く社会と空間――』

本書は、大阪・京都・神戸を中心とする京阪神地域の諸都市を対象に、前近代から今日までの都市形成の諸過程におけるさまざまな局面で、どのように政治力学が作用しながら都市空間が構築されてきたか、その諸相を具体的に提示しようとするものである。大きな特徴は、さまざまなスケールの地図（地形図、市街図、主題図など）や空中写真、景観写真等が多用されていることである。地図読解とフィールドワークをセットとして都市空間に切り込むアプローチの有効性を、地理学の研究者や学生たちだけでなく、広く一般の読者にも示そうとする筆者たちの意図は明確である。加えて、新聞、自伝、文学等を豊富に引用し、都市空間にかかわる記述や言説、表象のされ方から、人々が都市空間をどのように消費したかを明らかにしようとしている点にも特色がある。

全体の構成は、四部一〇章からなり、各章ごとに特論として一～三のケーススタディが紹介されている。まず第Ⅰ部「近代都市空間の成立」では、明治・大正期に城下町が変貌する様子が描かれる。無秩序で自然発生的な新市街地が旧中心市街の周縁に出現し、インナーリングが形成された。この地域は、その後の都市空間形成の主要な舞台である一方で、前近代の都市空間の特質をさまざまに反映する地でもあったことが指摘されている。

第Ⅱ部「モダン都市」では、大正から昭和にかけて、郊外や盛り場という新しい都